

第5回新鋭俳句賞

準賞

「孤村記」三十句

玉木たまね

孤村記

湧き水の零るるごとく子蛇落つ
岩魚焼く山椒味を腸わたとして
蚊に尋ぬわたくしの血はまだ赤か
山神の寢息のごとき濃霧かな
鹿泳ぐ湖うみの薄皮剥ぐやうに
目を縦に回し牡鹿や草食める
止め刺しの刃に蒼穹や鹿の眼にも
鼬吊る喰はれし鶏とろの首の前
剥製に見張られてゐる狩の宿
くつくつと咲む大鍋の猪頭しじみたま
どぶろくに今宵つま先から眠る
無口なる獵夫や犬語堪能も
この道は姥捨の道けふは雪
注連繩にぬかづき吾も獵犬も
念仏を白く吐き出す獵夫かな
ゴドー待つやうに二人や狩場の木
積みあがる骨呪術めく獵師小屋
誰も彼も美しき指獵夫一家
熊を撃つ綺麗に死ねるやうに撃つ
熊の腹裂く軽トラの腑分け台
魂も抜き去り熊の血抜かな
影だけを生理にして夕枯野
川より上がり細き犬夕焚火
仔熊飼ふ母熊撃ちしその夜より
血を乾杯す熊鍋に与れば
身語りは北の訛りや老獵夫
遠吠えの長さに氷柱そだちゆく
山眠る仔犬座そばに遊ばせて
死化粧めきて孤村の桜隠しかな
獣にはなれぬ吾が身や落椿